

女性作家の見た〈南方〉

——林芙美子と佐多稲子のスマトラ——

鳥木圭太

一 林芙美子と佐多稲子の〈南方〉体験

林芙美子と佐多稲子は、一九四二年、陸軍報道部の要請により、美川きよや小山いと子らとともにマレー・ジャワ・スマトラを訪問している。一行は広島の宇品からシンガポールに寄港し、そこから各自の旅程に沿って南方各地を視察している。

当時〈南方〉と呼ばれたのは、一九四一年一月八日の真珠湾攻撃とマレー半島上陸作戦で端緒が開かれ、緒戦での軍事的勝利によって獲得されたアメリカ領フィリピン、イギリス領マラヤ、同ビルマ、そしてオランダ領東インドの諸地域である。この東アジア諸地域において日本軍は「南方軍政」と呼称される占領統治を実施し、その宣伝・文化工作のために多くの文学者が所謂南方微用作家として現地を訪れた。

林芙美子や佐多稲子ら女性作家の多くは、臨時微用という形で新聞社の現地特派員が記事提供を条件に便宜を図ることとなっ

た。芙美子には朝日新聞、佐多には毎日新聞がそれぞれついた^①。佐多の旅程については明らかになっていない部分も多いが、広島からマレー半島までは共に行動し、そこからそれぞれの旅程へと分かれたようである。芙美子はマレー半島を北上した後、ジャワ島に移動し、ボルネオを訪れた後に再びジャワ島からスマトラを北上している。佐多はマレー半島を北上した後再びシンガポールに戻り、そこからスマトラの北端バンダアチエに移動し、芙美子とは逆にスマトラ島を南下し、メダンを拠点に各地を訪問している。両者の旅程には重なる部分も多く、佐多が証言するように、実際に佐多と芙美子はスマトラのメダンで再会している。

当時に戻って少し付け加えれば、スマトラ行きでは小山いと子さんといっしょであったが、スマトラ中心地のメダンで林芙美子ともまた出会った。シンガポールで別行動になり、ジャワからスマトラ南部を廻ってきた芙美子は、メダンへ着くと、私の泊めてもらっていた毎日新聞社に同宿した。そして

彼女は短い滞在中に、おいしい汁粉を作ったりした。戦後に芙美子の「浮雲」を読んだとき、それをおもい出し、尚、この作の女主人公のイメージに、「虚偽」の中で描いたタイピストの、船が無事に着いて嬉しい、と私の膝で泣いた姿がまざまざと重なるのを感じた。「浮雲」の主人公の男女二人は、あの当時の「南方」へ行った人間、ということ前提にして一層、鮮明になる人物像である。それはまた、当時の「南方」ゆきのひとつの気質とそして本質とを『浮雲』の男女二人の経路の上にとらえたものとも云え、それを表現した林芙美子の作家的な視線と力量の、確かさをおもおう。

中川成美が、当時日本国内においては「社会的言説にも一挙に「南方」が浮上していわゆる仕掛けられた「南方ブーム」が巻き起こる³⁾と指摘するように、すでに「南方」という言葉にはひとつのイメージが表象されていた。

林や佐多らがこうした「南方」イメージの強化に寄与したことはいうまでもない。しかし、彼女ら自身がまたそうしたイメージの中に自らの自己意識を投影し、内地では見ることのできない何かを見ようとしたのもまた事実である。両者が「南方」イメージによって彩られた土地で何を見、どのように作品の中で表象したか、そこから生み出されたイメージの差異を浮き彫りにしてみたい。

二 芙美子の見たスマトラ

林芙美子は、〈南方〉をどのように体験したのだろうか。スマトラのパレンバンからジャンビーへと向かう道中の体験を綴った紀行文「スマトラ——西風の島——」(『改造』一九四三年六月・七月)では、次のように現地の人々の姿を描いている。

私は、南洋の土地の風俗や習慣のなかに、非常に日本的な親近なものを感じるやうになり、山田長政以前の、もつと遠い昔から、人の交流や、植物の流植と云ふものはあつたのだからとなつかしく南の風物を眺めた。たとえば、住宅にしても、服装にしても、如何にも日本に似通ふてゐるところが多くて、その点では、隣の支那大陸とくらべてみて、むしろ、南洋の諸国の方が、日本に向つては多くの通じるものがあるやうに考へられるのである。住んでゐる人達の肌の色は褐色で、日本人に近い骨格は、人種的に云つても、私達よりずっと遠い人達とは思えない。…

(中略)

賑やかなところはほとんど華僑の住居と云つてもいい。ポルネオでも、馬來でも、爪哇でも、スマトラでもそうだったけれど、海辺とか、河岸に近い都会には岩にくっ、いた貝のやうにかならず華僑が住んでいた。栄記とか福録公司とかのめ

でたい文字の金看板をか、げて、華僑は賑やかに此南方地域の都会に繁殖してゐる。パレンバンのバツサル街にも停子脚の軒をつらねて、華僑が賑やかに店を出してゐた。表情のない支那人の顔は、烈日の空の下では病人のやうに肌が青く見えた。

こうした描写からは、当時の南方を紹介する紀行文に多く見られる、人種や民族を描く際のステレオタイプを美美子もまた踏襲していることが窺えるが、彼女はそこに止まらず現地の人々と積極的に関わり合いを持ち、彼らとのコミュニケーションを通して現地人の姿を描き出そうとする。

たとえば、現地人の子弟のために創設された日本語学校、瑞穂学院で学ぶ少年達と交流した美美子は、その内の一人「モハマド・ザハリ君」の作文を紹介し、「三ヶ月の修行で、漢字やひらがなが書け、通訳なしで、これだけの意味がくみとれると云ふ事は大したことだらう。インドネシアの優秀な青年達が、一人でも多く日本の言葉を理解し、日本を識ろうとしてゐることは頼もしい事である」と感想を述べている。

また、パレンバンを出発し、パダンへと向かう車中で、現地人の運転手との交流については次のように描写する。

遠い旅路なので、運転手は二人つけてあげませうと云つて、インドネシアの青年シヨフェルを二人つけて貰つた。(中略)

十二時四十分パレンバンを出発。前の日は夕方からひどい豪雨だったので、私は途中の道を心配しなければならなかつた。街はづれのカンボンで、シヨフェルにバナナと蜜柑を少しばかり買はせた。運転手はふとつた方がアケトと云つて、二十二才で母親と二人暮らしたと云ふことだつた。レスリングの選手のやうない、体格をしてゐる。性質は優しく考へ深い。現在は日本の軍隊の仕事もさして貰つてゐると話してゐた。瘦せた方はワウイと云つて二十一才、無口で支那人のやうな骨格をしてゐる。自動車はシボレーの四十一年だとかで乗心地はいゝ。石油の産地の旅行なので、まるでガソリンの海を漂流してゐるかのやうな安心した感じだつた。

さらに、後編ではトロコワリーの部落でパンク修理を手伝ってくれた自転車屋の息子ラジエル君や村長のパテイラヘム氏、バタンハリー河の渡しで出会つた少女エマ、渡して一緒になつた日本語を流暢に話すアキチンギの呉服屋の番頭ミスなど、現地の人々との交流が詳細に描かれていく。

トロコワリーの部落へ着いたのは三時頃であらうか、こゝではまた自動車のタイヤがパンクしたので少し休んだ。茶店の隣に村長の家があつたので、その家の土間で少し休ませて貰ふ。(中略) 自転車屋の息子でラジエル君と云ふのも私の自動車のパンク直しを手伝つてくれた。三時半頃カンボン・

トロコワリーを出発する。田舎の行商人、呉服屋なにがしと云ひたいやうなトロコワリー村長バテイヤラム氏に茶代を一円置くと、子供も妻君も出て来て、またこゝを通やうな事があつたら是非寄つてくれと云つてくれた。人情に變りはないものだと思ふ。

三四十分して、プロムサンと云ふ村の川岸へ出た。バタンハリーの大河が悠々と流れてゐる。(中略) 私は手拭を頭に巻いて色眼鏡をかけて河岸へ降りてみる。(中略) 十五ばかりの女の子で、仏様のやうな顔をした美しい娘がゐたので、名前は何と云ふのかと尋ねると、その小柄な娘は人なつ、こそうに私のそばへ寄つて来てエマと云ふ名前だと教へてくれた。(中略) 色の黒いエマもサロンを胸から巻きつけて流れにはいつて行つた。頭からづぶりと水に濡れてゐる。何となく川端康成氏の描く少女のやうである。(中略) 渡しではパダン行きのバスと一緒にゐた。(中略) バスの窓からのぞいてゐたインドネシアの青年が、ふつと「あなたは、どこの方へ行くか」と私に話しかけて来た。案外な場所で日本語でしゃべられたので、一寸吃驚してしまふ。少しばかり日本語を知つてゐると云つて、その青年はなかなか美しい日本語を話した。(中略) この青年はパダンの近くにあるブキチンギへ来る事があつたら是非寄つてくれとなかなかあい、そのいゝことを云つてゐた。⁷⁾

山下聖美はこのような林美美子の紀行文の特徴として、同時期にスマトラに派遣されていた大手新聞社特派員らの紀行文と比較し、次のように述べている。

重要なのは、美美子は、現地の人々に多大な関心を示し、運転手や出会つた人々の容貌や年齢、家族構成などを紹介しながら、必ず個人の名前を記していくことだ。(中略) 資源も重要であるが、美美子の関心はそれ以上に、この地において、どのような人々がどのように生活を営んでいるのかということにあつた。人々へのまなざしの深さ、これが美美子の紀行文の最大の特徴である。⁸⁾

もちろんジャーナリストである新聞特派員と、作家である林美美子ではおのずから切り取る風景が異なるのであるが、現地に出会う人々を固有名を持つ一人の人間として描きだしているということは、美美子がどのように「南方」を体験したのかという事を考える際の一つの大きなヒントになるように思われる。だがいづれにせよ、こうした南方での体験が具体的な小説作品として結実するためには、戦後の多作期を待たねばならない。

次に同じ作家として佐多稲子がどのように「南方」を描いたのかを見てみよう。

三 佐多種子の見たスマトラ

佐多の紀行文の特徴は、戦後彼女自身が「旅行者の見物」であったと語るように、観るべきものとして用意された植民地の情景を、外部の人間の視点から観察するように切り取るという点にある。

当時の「マレー半島」とスマトラ北部を廻った私の場合、中国で出会ったような辛いおもいをするのではなく、まるで旅行者の見物に過ぎなかった。強いて云えば帰国の便が自由ではなく、航路には危険もあるという状態ではあったが、私は、その地の風景や生活習慣がもの珍しく、楽しんでさえいた。このときの私には、中国でのような、ひそかに泣く、ということでは合理化したあの経験は、もうなかった。

スマトラで触れた現地住民の生活習慣を紹介したエッセイ「南の女の表情」(『文芸』一九四三年六月)では、佐多の視線は、スマトラに暮らす人々の生活習慣や文化に注がれ、特に各民族の習慣や生活様式からくる女性の表情の違いについて詳細に記録していく。

スマトラ中部の西海岸州のパダン地方にいるメナンカバウ

女性作家の見た(南方)

人は教育も普及されてゐるし優秀な人種だとも聞いてゐたが、母系制度が保たれてゐて女に権利のある所だといふのが誰からも聞かされることであつた。(中略)さういふ一軒の家に、私たちは案内された。(中略)その家は丁度私たちを案内した人の親戚の家だといふことで、だから、階段の上に現はれた若い女の態度も、率直に親しみを表はしてゐた。(中略)丸顔の、頤の張つた、もの怖ぢしない表情で、肩つきも厚くて、身体のこなしなども闊達である。案内の親戚の人と何か話し合ふ顔つきなど、丁度、日本の田舎の小母さんで気性の勝つた男まさりともいはれるやうな人の面ざしに似てゐる。／彼女はこの家の一人娘で、年齢はまだ十八才だといふ。私は初めてこの若い女の表情に、村の母系制をはつきり見たやうにおもつた。(中略)たまく／私は、典型的なメナンカバウの家と人の顔とを見たのかも知れない。(中略)町の、知識階級だといはれる小学校の女教師たちの表情には、またメナンカバウの別の表情があつたのだから。(中略)／メナンカバウの知識婦人といはれる人たちのまなざしは、村の若い主婦の表情にあつたやうな物怖ぢのなさと同時に、もうその視線に自分の内部を表現する術を知つたものの動きがある。

(中略)

ジャバから移されてくる農園の苦力たちの忍従と暗さの顔、その苦力たちの長屋の中に一軒づつ、店を開いてゐる支那

商人の、表情を隠したすべっこい顔、いろ／＼な顔があつた。農園の苦力たちを指図するアンボン人の青年の顔つきの度ぎつさもあつた。腕のいゝ自動車運転手の馬來人の顔に、しやれたもの憂さに自信を見せてゐるものもおもしろかつた。また昭南の町で見た福建の女苦力の顔がどれも／＼、さつぱりと水で洗つたやうに、こだはりのない顔つきたつたのは、不思議な気がした。

ここで佐多は、芙美子とは対照的に現地の人々の表情を個人ではなく、人種や民族の表象として読み取ろうとしている。もちろん佐多も芙美子のように現地の人々と交流をするのであるが、書かれたものを読む限り、そこには芙美子のように現地の人々の間に入り込み、その生活を内部から捉えるという視点は希薄である。芙美子のように人々を名前を持つたひとりの人間として捉えるよりは、むしろ民族の特徴や現地での生活の情景を一つの風物として捉えているかのような筆致である。こうした佐多の紀行文は、当時の紀行文の定型に沿って書き流しているかのような印象を受けるものである。

佐多は人種や民族の典型を人々の表情の中に読み取ろうとしているが、そこには彼女の意識に予め保存されている現地の知識やイメージがあり、そこから現地の人々の表情を意味づけていくのだ。

たとえば長谷川啓は佐多が南方訪問で残した多くのメモの中

に、南方民族の特質についての記述があると紹介している。

さらにそれぞれの国の人々について記したくんだり。アチエ、ガヨー、サハルを含むアチエ人は、性質がきわめて荒く、男は腰に刃物をおびて歩き、農業牧畜をおこなうこと。バタック人でもシマロンクは性質は温順、教育程度はやや高く全般的に怠慢、カローは性質は悪いが教育は前者よりやや高く、労働を好み守銭奴的と他より警戒されている。トバは医師、教師、弁護士、公務員がいるが、トバコ附近は無教育、アンコーラは女性的で衛生知識あり、勤め人はいない。ディリーミントン（パクパク）は、以前は人喰人種で殆ど無教育。ミナンカバウ（バタン）、ミナカハラ、リチ、クブスとも、一般的に教育高く七〇％は教育あり。激し易く白人に反感、独立運動を起こす。などと、当地を支配する日本軍にでも聞いたのか、そのように記している¹¹。

こうした民族的ステレオタイプの列挙は、人種・民族が現地の社会構成に大きな影響を与えていると佐多が認識していたことを窺わせる。また次の引用に見られるように、佐多自身の記録では農園視察、クーリーに関する記述が多いことから、当地における民族問題・階級問題・ジェンダー編成へ彼女の強い関心が窺える。そして、こうした現地人に対する認識が佐多の文学作品に反映されていくことは言うまでもない。

結婚の実態についての記録もある。恋愛結婚はなく、「仲人結婚」で、女は十六〜十七歳、男は二十歳ぐらいで結婚。「オランダ人との結婚はない、ユーラシアンはゐない、支那人との結婚はある、混血児も」とある。

(中略) 日本に関わることでは、(中略)「傲慢でないといふ点で日本人に希望を持つてゐる。気分的、解放的でよい。独立はのぞまぬ 初めは独立させてくれるとおもつていたが、もうそれはあきらめた」と、現地の人々の気持ちを記している。

(中略) プロレタリア作家として出発した佐多稲子らしく、苦力についての記録が多く、「東海岸で苦力の数 男一七〇〇〇、女三二〇〇〇、子ども一五万七千。ジャバ人殆どマレーは支那、印度、マレー人。タバタリアチエノで四〇〇〇万 苦力の給料 男三五銭、女三〇銭 米、支給、けれども差引く 現在は着られぬ 苦力によつて二七銭(中略)オランダ人は絶対におつたりけつたりしなかつた ながつたら罰座、オランダ政府の法てい 支那印度人の苦力 マレーはストライキ、ボイコットが多かつたがスマトラは無かつた。十年前の共産運動ジャバより来た。メナンカバウ人には苦力はいない、日本人エステート二七〇人、三〇人本土の人。マンドル苦力頭前はよかつたが中学を出て工場の倉庫係をやつて兵隊の伍長をやつて来たがエステートで大きな家に入つてトンプツサルになつて駄目になつた」と明記されている。

林美美子の場合も同様であるが、当時の日本の植民地について何をどのように描くかという事に関しては、大きな制約があつたのはいうまでもない。軍政下の植民地において当局が提示する題材を描くということは、彼女ら「南方徴用作家」に期待される役割であると同時に、彼女らが提出し続けねばならない(転向証明)でもあつた。作家たちはそれぞれ描くべき事柄と描けない事柄の狭間で動揺しながら(南方)という空間を体験したのだ。

そして佐多の作家としての本領は、こうした紀行文よりはむしろその体験をもとにした小説作品にあるだろう。実際に、佐多の(南方)体験は戦時中にいち早く小説化されているが、たとえば、『文芸読物』一九四三年八月号に掲載された「髪 of 歎き」は、日本による軍政一周年記念を間近に控えたスマトラのメダン市が舞台となっている。

英国系オランダ人とフランス系マレー人を両親に持つ主人公のベエの一家は、日本との戦争によつて父親が行方不明となり、残された一家は家財も没収され、当局の監視のもとに暮らしている。ベエは日本の新聞社のメダン支局に事務員としてつとめており、支局長吉川を敬愛している。あるときメナンカバウ人のタリプにお茶くみを命じられた屈辱を吉川に訴えたところ、吉川から、男性で学歴のあるタリプは女性事務員のベエよりも上だと逆に諭されてしまう。ベエは自分が白人の混血児であることで疎外されていると思ひ込み、自分の髪の色が黒くないことを嘆く。ある日、吉川とのやりとりの中で、日本女性がピアノやバレエを嗜

むことを聞いたベエは、西洋人であることをどこかで特権的に考えていた自分の傲慢さに気づき、日本女性の慎ましさを身に付けようとする。それからしばらくして、ベエは吉川からスマトラ新生一周年記念行事に、ミス・大東亜の一人として選ばれたことを知らされ、喜びに胸を弾ませる。

「髪(の歎き)」には、オランダ人、日本人、メナンカバウ人、中国人(華僑)、ジャワ人、インド人、等々、多様な民族・人種が登場し、主人公のベエのような所謂「混血児」の存在も植民地空間を構成する重要なファクターとして設定されている。物語の舞台であるスマトラをはじめとした「南方」は、「欧米宗主国、日本、そして植民地側の多様な民族集団・政治集団(欧化エリート、ナシヨナリスト、社会主義者、民主運動など)が合従連衡を含めて激しい争奪戦を繰り広げる混乱した政治空間¹⁵⁾であった。こうした植民地空間において「混血児」は人種だけでなく、文化や生活様式、あるいはアイデンティティや共同体への帰属意識も含めた意識の(混血)のメタファーともなっているのだ。

インドネシアにおけるプランテーション労働運動史研究家アン・ローラ・ストラーは、こうしたスマトラ北東部のデリと呼ばれるプランテーション地帯における労働史を分析するなかで、オランダによる資本主義経済の導入とそれともなう法人資本による土地収奪があったことを指摘し、ジャワから大量の労働移民(クーリー)が流入し、複雑な人種・民族的ヒエラルキーを形成していたことを明らかにしている。

ジャワでプランテーションの会社が拡大したのは、周辺の村から集められた労働力のおかげで、労働力の維持と更新には周辺の村の役割が決定的であった。ジャワとは異なり、スマトラ東岸では最初中国人労働者が、後にジャワ人労働者が何十万人と連れて来られた。彼らは農園のバラックに泊まり、食事をし、年季契約という身分に縛られていた¹⁶⁾。

こうした労働者たちは、度々雇用者らと対立して暴動を起こしていたが、ストラーが指摘するように、そこには民族間の対立だけでなく、経済的に規定された社会階級間の対立が織り込まれていたのである。

スマトラの土地が不正なやり方で急速に奪われ、そしてジャワ人労働者が疎外されたことは、スマトラ東岸で発達した緊張した労使関係の一部でしかない。そこではまた、きわめて厳格な人種的・民族的な序列があり、スルタン制と植民者の支配を持続させるよう強制され、操作された。このことは特に行政の問題で明白だった。そこでは直接統治と間接統治の領域が細部にまで規定されていた。移住してきた農園労働者はすべて、オランダ植民地／植民者当局に直接的に従属していた¹⁶⁾。

こうした状況のなか、日本軍は現地において軍政を敷いたわけ

であるが、「髪の毛」にはこうした民族・階級・ジェンダーが複雑に入り組んだ様相が、主人公のベエの視点を借りて描き出されていく。

ベエは日本の新聞社の支局長である吉川に、恋愛感情にも似た好意を寄せるが、おなじ支局の中ではたらく他の現地人スタッフには強い反感を抱いている。作中、メナンカバウ人のタリブからお茶くみを命じられたベエが、その不満を吉川にぶつけるという場面が描かれる。

「タリブは男であるから、事務員同士の中ではタリブの方が上である。だから、電話を聞け、と命じることがはあるかも知れない。しかし、この支局に於いては、すべての権利は、この支局の主である自分にある」(中略)

「それでは、タリブは私よりも上なのか」(中略)

「さうだ。タリブは昭南のハイスクールを出てゐる男の事務員であるから」

嘘だ、とベエは心のうちで叫んでゐる。タリブは原住民だから、日本人は白系の混血児よりも原住民を上に見てゐるからだ、と思つてゐる。

「それでは！」(中略)

「アミイと私は？」

アミイは自分の名前が出たので、きつと顔を上げて断髪をぱらりとふるはせた。吉川はちよつとつまつた。支那人の小

間使ひと、白系混血児の事務員とどちらを上とすべきか。

「君たちは、ベエは事務員であり、アミイは小間使ひである。自ずからその職域が別なのだから、どちらを上にし、どちらを下にするといふ区別をつける必要はない」

アミイは英語が分らないのだから、吉川の話が終つても、きつとなつた表情を変へないでゐる。ベエはうつむいたま、黙つてゐることで不平を現はしてゐた。

「君たちは同じ年頃の女の子なのだから、友達にならなければいけない」

(「髪の毛」三)

ここで吉川は、「ミナンカバウ人」と「白系混血児」という民族間に横たわるヒエラルキー¹⁷に、「昭南のハイスクールを出てゐる男の事務員」というジェンダー・階級の覆いを掛けることで、問題が民族対立にあることを隠蔽しようとする。

しかし、この吉川の欺瞞は即座にベエによつて見抜かれる。ベエはこの「大東亜共栄圏」の欺瞞に気付いているのだ。そこですかさずベエは「アミイと私は？」と次の問いを投げかける。アミイはベエと同年代の中国人の娘で、ベエは特に彼女に対し強い反感を抱いている。吉川の説明が事実であれば、同じ女性同士であるアミイにはこの論理は適用されないはずだからだ。そして、本当に社員の能力を重視するのであれば、英語がわからないアミイより、ベエの方が職位は上になるはずだからだ。

しかし吉川は、今度はベエとアミイを「同じ年頃の女の子」という同列の立場に置くことで、はからずも彼の論理が欺瞞であることをさらけ出してしまおうのだ。

吉川の駆使するこうしたロジックは、民族間ヒエラルキーを維持し統治政策に利用しながらも、逆に民族間の平等と宥和を説くという、一見矛盾したスマートラ軍政監部の民族政策を如実に反映しているといえるであろう。

重要な点は、佐多がベエにこの欺瞞を看破させておきながら、日本女性への自己同一化を欲望させることで問題の解決を図っている点である。ベエの不満や疑念は何一つ解消されていないにも関わらず、この後ベエは「タリブと言ひ争ひをしてそれをミスタ吉川に訴へたときも、それを裁くミスタ吉川の態度は立派だった」と自らの認識を改めるのだ。そして「髪の毛が黒かつたら、ミスタ吉川に親しい気持ちをもつと率直に現はせるだらうか」と、彼女の民族・階級・ジェンダーを含めた身体性の記号である髪の色を否定し、日本人への同一化を志向していくようになる。ここで描かれるベエの分裂した意識は、被植民者が植民地イデオロギーによって自らの主体形成を果たそうとする姿を浮き彫りにしているといえるだろう。

これまで「髪の歎き」は、佐多がプロレタリア作家であったという経歴を持つことから、彼女の時局への迎合と転向を示す作品として批判的に言及されてきた。たとえば長谷川啓は「オランダを退けて日本の占領下に置こうとした当時の現地の状況の中で考

えて見る時、やはり一種の国策文学としかいいようがないように思われる」と述べ、また北川秋雄も「恋愛という一個の人間感情を国策宣伝の手段として、作品の中で扱う佐多の作家としての退廃」¹⁹を指摘している。

こうした国策文学という評価は、作品そのものの評価としては妥当であるといえるだろう。しかし、植民地における言説空間が如何に構成されていたのかを考える際に重要なのは、そこで作家が何を観て、何を描いてしまったのかということである。すなわちここで佐多が描いてしまったものとは、民族とジェンダー、そして階級によって人間が重層的に絡め取られる植民地空間の暴力性そのものなのだ。

そして、この作品が日本の読者にむけて発表されたことをふまえるならば、吉川の姿によって表象される植民地における男性主体のいやらしさに対する皮肉に満ちたまなざしを看取することもできるだろう。たとえば、日本女性について尋ねたベエに対し、「ヤング・レディはね。よき妻、よき母になるために修養してゐる。イケバナとかオチャといふ作法があつて、それはしとやかなものであり、日本婦道の哲学をも体得させるものだ。然しそれだけぢやない。ピアノも弾くし、バレエををどる令嬢もあるし、そしてみんな働くのだ」(「髪の嘆き」四)と説明する吉川の姿が、引き合いに出された当の内地女性読者にどのように受け取られたのかを想像することは、この作品が誰に向けて書かれたのかを考える際に重要な手続きとなるのではないだろうか。

四 佐多稲子の〈戦後〉

佐多稲子は、戦後自らの〈南方〉体験を、小説「虚偽」（『人間』一九四八年六月）のなかで振り返っている。タイトルになっている「虚偽」という言葉は、かつてプロレタリア作家であった主人公年枝が、軍の要請によって南方に赴いているという矛盾と欺瞞を象徴したものだ。年枝は自分の意識にかぶせていた「虚偽」、つまり自分は「この戦争の本質を知っていて、そして結末の様相に対する想像も不逞なものを抱いている」が、あえてその意識に覆いを掛けているのだ、という意識を抱いている。年枝はそうして自分の矛盾と欺瞞に満ちた行為を、自分の本質とは異なる虚偽であると意識する事で、徴用作家として戦時中の生活をやり過ごしていくのだ。

年枝が表面の虚偽を、内心で意識する事に頼っているときも、その表面の役割は彼女をしばしば滑稽な立場に立たせ、そこに立てば彼女は、その演技をやったのけた。それは彼女が日本を代表するひとりの役に立たせられるときである。

ここにある「滑稽な立場」とは、スマトラのパダンで現地の知識人女性達と会談した年枝が、そのうちのひとりになぜ日本は日本語教育を強制するのか、なぜスマトラを独立させないのかと問

いかけられ、「独立の時期ということがあるでしょう。今では危ない、と日本はおもっているのではないでしようか」と彼女自身も信じていないような宗主国の建前で誤魔化してしまうというエピソードを指している。この場面での年枝の心理は、「心の中に、演技の真がのりうつり、彼女はほんとうに日本政府を代表しているような傲ぶった感情になった」と描かれる。

しかしそうした意識自体が、戦時体制の中に組み込まれてその体制を強化していくものであり、自らの行為を虚偽であると認識する意識自体が、実はすでに虚偽であったという事が、戦後に自分の南方行きを批判するかつてのプロレタリア文学運動の同志たちとのやり取りのなかで明らかになってしまう。

四畳半に八、九人の男女が談笑していた。彼らはお互いの今日までの苦痛について、笑いながら話していた。（中略）
「しかし、みんな変わらないなア」

自分も不思議なほど変わっていないもうひとりのNは、やっぱり十七年間の牢獄から出て来ている。そう言って一座を見まわしたが、その視線も、年枝は自分のところだけ素通りしてゆくのを感じた。年枝はその話の中へ入ってゆけない。人が入らせないというよりは、彼女自身が、無理に割り込んでゆけば自分だけ言葉つきのちがってゆきそうなものを感じ、唇は自ずと、結ばれたままだ。（中略）はつ、と気のついた考えは深くにじみ込んでゆくばかりであった。一緒だと

おもっていたところから自分だけ遠く離されていた、とおもうと、羞恥といっしょに、ぼつんと肩先のうそそする孤独感を感じた。(中略) だって、だってという反問であった。彼女の主観で、悪いことをしたとおもえないところに、だって、という反問が生じた。彼女のよそおった虚偽について、友達は、知っていたのではないのか。²¹⁾

つまり小説「虚偽」とは、戦争協力を要請する日本の社会に対して、作家がとっていた面従腹背の虚偽意識自体が虚偽であったことが暴かれてしまうという、意識の二重性をテーマに据えた作品なのだ。

佐多は「虚偽」という作品によって、戦後の作家の戦争責任を追求する風潮の中で、自らの体験をもとにその意識の虚偽性を暴き出した。それは戦争協力をした作家本人だけでなく、同時に戦争協力をさせた周囲の状況までを告発するものであった。そして、こうした虚偽の意識は、彼女自身が戦中に「髪を剃る」で描きだしたような植民地イデオロギーによる「混血の少女」の主体形成のあり方と重なるものではなかっただろうか。それはプロレタリア作家であった佐多自身が、植民地としての〈南方〉に到達するまでに形成してきた自らの意識を、植民地の現実の中で生成される虚偽意識と重ね合わせたことを表した言葉でもあっただろう。

五 林芙美子の〈戦後〉

一方で林芙美子の戦後は佐多のような自らの戦争責任の凝視とは別の形をとることになる。

〈戦後〉というチームは、未だ国民ひとりひとりの中で継続する〈戦争〉を覆い隠し、〈復興〉という共同体のあり方へ人々の意識を向けさせていく。林芙美子の描く戦後小説の多くは、こうした〈戦後復興〉のイデオロギー性と欺瞞性への懐疑に満ちている。²²⁾

そこで芙美子が直接的に想起するのは、戦争で死んでいった人々、そして戦争を生きた人々の姿である。

私は二三年位の歳月をかけて、はかなく戦死していった人たちのことを書きたいと思つてゐます。もう戦争ものなんか沢山だといひとありますが、日本にとつて、よかれあしかれ避けがたかつた宿命としてのこの戦争を、私の眼でみたゞけのことを力いっぱい書いておきたいものだと思つております。無益な戦争によつて生命をなくした何百万の兵士に対して、この戦争をこのまゝ、忘れ去るにはしのびがたいものを私はどうすることも出来ません。²³⁾

こうした芙美子の意識は、数々の戦後短編小説を経て、戦後の代

表作「浮雲」へと流れ込んでいく。

「浮雲」では登場人物たちがダラットでの自分たちを「夢を見ていた」「気が狂っていた」と表現する記述が目につく。たとえば、日本で再会したものの、ダラットでの情熱を失った富岡がゆき子に別れを告げようとする次の場面である。

「いや、そうぢやない。君には申し訳ないんだ。ね、正直に云へば、僕達は、あんな美しい土地に住んでから夢を見てゐたのさ。そんな事を云うと、君に叱られさうだが、日本へ戻つて来て、まるきり違ふ世界を見ては、家の者達をこれ以上苦しめるのは酷だと思つたんだ。」

また、次の引用は伊香保へ向かう直前にゆき子と富岡が交す言葉である。

「仏印はよかつたね……」
「あら、貴方もそう思つていらつしたの……。私も、いまね、仏印のことを考へてゐたのよ。なつかしいわア……。あんなところ夢ね。私達、夢を見てゐたのよ。さうなのね……。夢を見てたんだわ。——でも、夢にしても、貴方に逢つたんだから、不思議だわ……」

次の引用はかつて仏印でゆき子や富岡と三角関係にあった加野

と再会したゆき子が、仏印での出来事を回想するシーンである。

「貴女には、本当に済まないと思つてゐますよ」
「厭ッ！私こそ、加野さんに、我ま、をして済まないと考えてるんですよ。あの頃は、どうかしてたのね。みんな狂人の状態だつたのね」

「全く狂人の状態だつたな。貴女がわざと僕の刀の方へもたれか、つて来たやうな気がしてね。僕は富岡を刺すつもりで、部屋へ行つたら、ゆきさんがゐたので、なほさらかあつとしてしまつたんです。いまから考へると、馬鹿な事をしたものだ」

このように、ゆき子や富岡は、「南方」のイメージの中に投影された自意識のありやうを敗戦後の日本で振り返っていく。しかし、こうしたダラットに象徴される理想郷としての〈南方〉の幻影は、彼らが宗主国の人間としてそこに存在することができた僅かな時間のみ存在した、文字通りの幻影にすぎない。ダラットの美しい自然や風物は、ゆき子たちが引き揚げた後にもそこに存在するにもかかわらず、その理想郷は敗戦後の時空のどこにも存在しない、過去形でしか語られることのないイメージとしての〈南方〉でしかないのである。

だとすれば、その〈南方〉イメージで充たされた空間で熱狂に浮かされていた彼女らの意識の有り様もまた、佐多の言うやうに

「虚偽」だったといえるだろう。

「浮雲」に代表される美美子の戦後小説は、みな戦時中の虚偽意識から抜け出せない人々の姿をそのテーマとしているように思われる。ゆき子も富岡も、戦時中から持ち越した虚偽の意識を抱えたまま、〈戦後〉の日本に自らの存在する場を確保することができず、浮雲のように漂いつづける。彼らの戦争はまだ終わっていないのだ。

人間と云ふものの哀しさが、浮雲のやうにたよりなく感じられた。まるきり生きてゆく自信がなかつたのだ。²⁷⁾

富岡は、まるで、浮雲のような、己の姿を考へてゐた。それは、何時、何処かで、消えるともなく消えてゆく、浮雲である。²⁸⁾

「浮雲」と「虚偽」という二つの作品の表題となつた言葉は、そのまま美美子と佐多の二人の南方にまつわるそれぞれのイメージを表象しているように思われる。佐多も美美子も自身の〈南方〉経験を元に、敗戦後の日本に自らの存在を定置するのを主題に据えて、作品を生み出した。それはアプローチは異なるものの〈戦後復興〉という言説によつて覆い隠され、今なお個人々の意識において継続する〈戦争〉を描くことで、そのイデオロギーの欺瞞から身を引き剥がしていく痛みを伴う作業だった

のではないだろうか。

注

(1) 神谷忠孝「南方徴用作家」(『北海道大学人文学論集』一九八四年二月)。同行した中央公論編集長黒田秀俊『軍政』(学風書院 一九四七年)では、「こんどの場合は、徴用と同様の趣旨で取扱うから、個人的な都合による辞退はみとめないということであった」(五八頁)と述べられているが、女性作家では辞退した者も多く、実際は作家個人にある程度の裁量が認められていたことが窺える。

(2) 佐多稲子「時と人と私のこと」(4)——戦時中と敗戦のあと」(『佐多稲子全集 第四巻』講談社 一九七八年、四四九頁)

(3) 中川成美「林美美子——女は戦争を戦うか」(神谷忠孝・木村一信編『南方徴用作家 戦争と文学』世界思想社 一九九六年)

(4) 「スマトラ——西風の島——」(『改造』一九四三年六月、傍線引用者)

(5) 「スマトラ——西風の島——」同前

(6) 「スマトラ——西風の島——」同前

(7) 「スマトラ(続)——西風の島——」(『改造』一九四三年七月、傍点原文)

(8) 「林美美子の南方従軍についての現地調査報告」③「スマ

トラ——西風の島——」「荒野の虹」「望郷」に描かれるス
マトラ」(『日本大学芸術学部紀要』二〇一三年三月)

(9) 「時と人と私のこと (4) ——戦時中と敗戦のあと」(『佐
多稲子全集 第四卷』講談社 一九七八年、四四八—九
頁)

(10) 「南の女の表情」(『文芸』一九四三年六月、傍線引用者)

(11) 長谷川啓「旅の記録・写真が語る戦地慰問(承前)——
佐多稲子の未発表資料をめぐって」(『城西文学』二〇〇一
年三月)

(12) 「旅の記録・写真が語る戦地慰問(承前)——佐多稲子の
未発表資料をめぐって」同前

(13) 『佐多稲子全集 第十八卷』所収年譜(講談社 一九七九
年)によれば、佐多は一九三四、三五年にかけて二回の勾
留を経験している。林芙美子も、一九三三年に「共産党に
資金の寄付を約束し、機関紙の送附をうけていたことから
「シンプアの疑い」の名目で九月中野署に九日間留置」(板垣
直子編『林芙美子 現代のエスプリ』所収年譜 至文堂
一九六五年)されている。

(14) 中野聡「植民地と南方軍政——帝国・日本の解体と東南
アジア」(倉沢愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦
争7 支配と暴力』岩波書店 二〇〇六年)

(15) アン・ローラ・ストラー『プランテーションの社会史
ゲリリ／1870-1919』(中島成久訳 法政大学出版局 二〇〇

七年、二頁)

(16) 同前、三四頁

(17) 第二五軍軍政監部参謀本部作成の「大東亜民族指導要綱
(案)」(参謀本部第十四課、一九四二年八月六日)によれ
ば、「ミンナカバウ人」はスマトラにおける「主人民族」
〔原則トシテ一切ノ権利、義務ヲ享有ス〕であり、欧米
人は「原則トシテ公務就任権、土地所有権ヲ認メス又居
住、営業、意志発表、集会結社等ニ関シテ制限ヲ受ク」
〔奇遇民族〕として取り扱われた(明石陽至編『南方軍政
関係資料』^② 渡邊渡少将軍政(マラヤ・シンガポール)関
係史・資料 第3卷』龍溪書舎 一九九八年)。

(18) 長谷川啓「太平洋戦争期の佐多稲子・2」(『佐多稲子論』
オリジン出版センター 一九九二年、一九頁)

(19) 北川秋雄「植民地文学と佐多稲子」(『佐多稲子研究』双
文社 一九九三年、二五八頁)

(20) 「虚偽」四(『人間』一九四八年六月、引用は『佐多稲子
全集 第四卷』講談社 一九七八年)

(21) 「虚偽」五(同前)、傍線引用者

(22) 拙論「林芙美子の〈戦後〉——短編小説を中心に」(林芙
美子の会発行『浮雲』二〇二二年一月)

(23) 林芙美子「キユリイ夫人の映画」(『改造』一九四六年四
月)

(24) 「浮雲」十六(『風雪』一九四九年十一月—一九五〇年八

月、『文学界』一九五〇年九月、一九五一年四月、引用は『林芙美子全集 第八卷』文泉堂出版 一九七八年、傍線引用者)

(25) 「浮雲」 二十二 同前、傍線引用者

(26) 「浮雲」 三十五 同前、傍線引用者

(27) 「浮雲」 二十二 同前

(28) 「浮雲」 六十七 同前

付記

本稿は林芙美子の会第一回研究集会(二〇一六年二月一六日、立命館大学国際言語文化研究所トラベルライティング研究会共催)における口頭発表をもとにしている。

尚、引用に際し、一部旧字は新字に改めた。

(とりぎ・けいた 本学助教)